棚の上

文と絵
柴岡治子

棚の上の高いところに、いろんなものがのせてありました。その中に、おばさんの気になって仕方のないものがありました。はきものの一種で、他所行きの下駄といった感じ。少し高くて、横のところは木の上に朱色のうるしが塗ってあり、模様もついています。表はたたみ表で「かっぽり」と言っていました。それは他所から子どものおばさんにと言っていただいたものです。

だけどおばさんのお母さんには、お母さんの考え方があって、「かっぽり」をはかせてくれません。ゼイタクな気持ちになると思っていたようです。

お母さんはどうも必要以上に、子どものおばさんがゼイタクになるのを心配していたようで、袖の長い着物も作ってくれませんでした。

小学校の頃、お正月の時などおばさんより少し年上のお姉さんたちは、みんな長い袖のきれいな着物を着ているのに、

小さいおばさんの方は、渋いオリーブグリーンに、むらさき色の丸い模様がとんでいるメイセンの羽織と着物のお揃いが他所ゆきでした。

今思い出してみると、とてもハイカラでしゃれた柄なのですが、子どもと大人の考え方や感じ方は少し違うので、子どものみんなに困ることはありませんか。

大人になれば解ることだけど、子どもの時には解らなくて悲しいような情けないようなこともあるのは、どうしたらよいのかな。

今も棚の上の「かっぽり」のことを思い出したりします。メイセンの着物の方は好きな色でしたから、袖の長いきれいな着物をきせて貰えなかったのは悲しかったけど、そんなに情けない思い出は残っていません。その頃として、ハイカラな洋服を着せてもらいましたから。でも洋服の方はうれしかったけど、少し恥しい気もしました。